

久保 榮全集

9

久保栄全集

第 9 卷 翻 訳

編集	宇野重吉	■久野収
	武谷三五郎	■野間宏
	羽仁正藏	■
解説	井上山	■北條元一
解題	内山 鶉	

三一書房

一九六二年八月二十五日 第一版発行

久保 栄全集 第九卷 定価一、四〇〇円

◎ 久保 マサ

一九六二年

検印
廃止

発行者 田 畑 弘

発行所

株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話 東京四九五八一―五番
振替 東京八四一六〇番

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 橋本製本所

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

久保栄全集

第九卷

目次 第九卷

日の出前 五幕（ハウプトマン作）

第一幕 九

第二幕 四七

第三幕 六六

第四幕 九四

第五幕 一二四

織工 五幕（ハウプトマン作）

第一幕 一四六

第二幕	二六七
第三幕	一九〇
第四幕	二二五
第五幕	二三七

漁船天佑丸 四幕（ハイエルマンズ作）

第一幕	二六九
第二幕	三三一
第三幕	三四六
第四幕	三七九

解題（内山 鵜）	四一五
解説（井上正蔵・北条元一）	四三七

日
の
出
前

社会劇五幕
(ハウプトマン作)

登場人物

クラウゼ 田舎地主

クラウゼの妻 後妻

ヘレエネ

クラウゼの先妻の娘

マルタ

ホフマン 技師。マルタの夫

ウィルヘルム・カアル クラウゼの妻の甥

シュピルラア夫人 クラウゼの妻の家政婦

アルフレット・ロオト

ドクトル・シンメルプエンニヒ

バイプスト クラウゼ家の作男

グステ

リイゼ クラウゼ家の作女

マリイ

ペエル 綽名、跳ね助ベエル

エドアルト ホフマンの下男

ミイレ クラウゼの妻の小間使

駈者の妻
ゴオリッ
郵便配達

シユ

通称ゴッ
シユ。牧
童

第一幕

粗末な部屋、床にみごとな絨緞が敷きつめてある。農民ふうの陋屋のところどころに、近代的な贅品が散在する。食卓のうしろの壁間に、額がかかっている。葉っぱ服の馭者が、四頭立の荷馬車を走らせている油絵である。

ミイレ、どこか間の抜けたあから顔の、丈夫そうな田舎娘、正面のドアを明けて、アルフレット・ロオトを案内して来る。ロオトは、中背で、肩幅が広く、ずんぐりした体格である。てきばきした態度の中にどことなくぎこちないところがある。ブロードの髪の毛と、青い目と、白っちゃけた薄い口髭の持主で、骨張った顔に、それと似つかわしいまじめな表情を浮べている。きちんとした身装をしているが、モダンな趣味はぜんぜんない。夏の外套、雑糞、ステッキ。

ミイレ どうぞ！　すぐと技師さんと呼んで来ますだ。まあ、掛けなさる！

温室に通ずるガラス戸が、激しく衝き明けられる。満面に朱を注いだ田舎女が、荒々しく駆け込んで来る。洗濯婆と間違われそうな、ひどい装をしてゐる。むき出した赤い阿腕、紺木綿のスカアトに同じ色の袖なし、赤い点々のついた胸当て。年齢、四十二歳。険のある、淫蕩的な、人の悪そうな顔かたち。五体は、まだ衰えていない。

クラウゼの妻（どなる。）この阿魔あ!!……しょうがねえな!……何んてわかんねえ女郎っ子だべ!

……帰^{けえ}つてくんろ！ おらとこあ、お断りだ！……（なかばミイレに、なかばロオトに）自分で稼^{かせ}ぎなさる、立派な腕があつてねえか。帰つてくんろ！ ここにやあ、何んにもねえだ！

ロオト いや、おかみさん……待つてください……僕は……僕はロオトという者で……実は、その、何んです……決して、そんなことをお願いに……

ミイレ そんだつて、この人あ、技師さんに会いてえと言いなさるだ。

クラウゼの妻 婿さん捕めえて、無心言う気だべ。おら、ちゃんと知ってるだ——婿さんだつて、何んにも持つっちゃあいねえ。おらとこの居候してるだもん、一文なしの御身分だ！（右手のドアが明く。ホフマンが首を出す。）

ホフマン お母さん！——お願いだから、よしてください……（はいって来る、ロオトのほうを向いて）

何か御用ですか……アルフレット！ 君か！ 何あんだ、君か?! しかし、こりゃあ……驚いたなあ！

ホフマンは、三十三四歳、ひよろひよろと背が高く、痩せこけている。最新流行の服を着て、髪の毛を洒落^{しや}れた形に刈っている。高価な指輪をいくつもはめている。ボタンに宝石をちりばめた変りチョッキ。時計の鎖に下げたメタル。頭も髻も真つ黒で、ことにその濃い口髭はきれいに刈り込んでいる。顔の輪郭がとがっていて、鳥を連想させる。はつきりしない表情、目は黒く生き生きと動くが、時どき不安らしい影がさす。

ロオト 僕は、何んにも知らずに……

ホフマン（昂奮して）こんな嬉しいことはないよ……まあ、少しくつろがないか！（手伝つて、雑糲^{ざつてつ}をはずしてやろうとする。）——こんな嬉しいことが降つて湧いたのは——（相手の帽子とステッキを受け取

って、ドアの傍の椅子の上に置く。——もう何年にもないことだよ——（元の場所へ帰って来ながら）
 ——ほんとうに久しぶりだ。

ロオト（自分で、雑嚢をはずしながら）僕はね——ここで君に会おうとは、夢にも——（雑嚢を舞台前方の
 テエブルの上に置く。）

ホフマン 掛けたまえ！ くだびれたろう、掛けたまえ——さあ。覚えてるかい？ 君は僕んとこへ
 来るたんびに、いつもこんなふうに、どしんとソファの上へ寝ころがったもんだっけね。よく
 スプリングがこわれちゃったっけ。ねえ、君、いいじゃないか！ 昔のとおりにやってくれたま
 え。

クラウゼの妻は、あつげに取られて見ていたが、やがて出て行く。ロオトは、舞台前方のテエブルを取
 り巻いた肘かけ椅子の一つに腰かける。

ホフマン 何んか飲むかい？ 何がいい！——ビールか？ 葡萄酒か？ コニャックか？ コーヒー
 か？ 紅茶か？ ここの家には、何んでもあるんだ。

ヘレエネ、本を読みながら温室を出る。背の高い、少し頑丈すぎる体格、ブロンドのあり余る髪の毛を
 たばねた束髪、顔の表情、モダンな服装、体のこなし、すべてに田舎娘らしい匂いが付きまとう。

ヘレエネ 兄さん、あのう……（ロオトに気がついて、急いで引き返す。）あら！ 御免なさい。（退場。）

ホフマン いいんだよ、お前、いいんだよ！

ロオト 奥さんかい？

ホフマン いいや、ワイフの妹だ。僕のことを、いま兄さんて言ったのに、気がつかなかったかい？
 ロオト うむ。

ホフマン シャンだろう！ ええ？——しかし、何にしよう。コーヒーか？ 紅茶か？ グロッグか？

ロオト ありがとう、何にもほしくない。

ホフマン (シガアをすすめて) じゃあ、これはどうだい——嫌きらいかい?! ……これも?!

ロオト いや、ありがとう。

ホフマン 羨ましいほど、慾ほがないんだねえ! (ひとりで、シガアに火をつけながら、切れぎれに) この灰……灰は、いいや……たばこ 暮たばこさ……うむ! 暮たばこの煙さ……僕がふかしても、君、迷惑じゃないだろうね?

ロオト うむ。

ホフマン せめて、こんなことでもしなくちゃあ……楽しみがないからねえ——ところで、その後、何んかおもしろい話はないかい、ええ、君——十年ぶりだ——それにしちゃあ、君はちつとも変っていないね——十年なんて、わけあないもんだなあ——あいつは、どうしたろう、シュ——シユスルツって綽名の奴がいたじゃないか? フィップス——ひどく賑やかな男だったねえ?

君は、あの連中のその後の動静を知っているのかい?

ロオト じゃあ、君はあの事件を知らないのか?

ホフマン え?

ロオト あいつが、ピストル自殺をしたことを。

ホフマン 誰が——自殺したって?

ロオト フィップスさ! フリイドリヒ・ヒルデブランドさ。

ホフマン まさか、君！

ロオト いや！ ほんとうにあいつ、自殺したんだ——グルウネワルトで。ハアフェル湖畔の景色のいいところで。僕もそこへ行ってみたが、ちょうど真むこうにシュパンダウの町が見えるんだ。

ホフマン ふむ！——そんなことをしそうな人間じゃあなかったがねえ。ふだんは、そんな勇氣なんぞ、ありそうにもない男だったか。

ロオト だからこそ、自殺したのさ——良心的な男だったからねえ、非常に良心的な人間だったよ。

ホフマン 良心的な？ そうかねえ？

ロオト たしかに、そうだよ……さもなければ、自殺するはずはないじゃないか。

ホフマン どうもわからないなあ。

ロオト 君は、あいつの政治上の色彩は知ってるだろうね？

ホフマン うむ、緑だ。

ロオト そう来るだろうと思ったよ。しかしとにかく、才能のある青年だったことは、君も認めるだろう——五年というものの、あいつ石膏細工で、飯を食っていたんだ、あとの五年間は、生活に追われながら、小さな胸像かなんかこしらえていたんだ。

ホフマン 気持の悪い代物だったね。美術品って奴あ、もっと朗らかなもんでなくちゃあ困るよ……

いや！ ああいった種類の芸術は、ぜんぜん僕の趣味に合わないんだ。

ロオト 僕も、あれは嫌いだった。しかしあいつは何と言っても自説をまげなかったよ。去年の春、記念碑の懸賞募集があったんだ、どこかの小さな国の領主を頌徳するんだとかいうことだったがね。フィップスの奴、それに応募して当選したんだ。それから間もなく、自殺してしまったんだ。

よ。

ホフマン どこが良心的なんだか、僕にゃあちつともわからないね——そんなのは、僕に言わせれば、神經衰弱だ——氣が小さすぎるんだ——脅迫観念——と言ってもいいね。

ロオト 世間の噂も、まさにそのとおりだったよ。

ホフマン 残念だが、僕もそれに同感しないわけにゃあ行かないね。

ロオト だが、世間が何と言おうと、どうせあの男は無関心だったんだから……

ホフマン しかし、まあ、その話はよそう。僕だって、そりゃああの男を惜しむ情においては、あえて君に劣らないつもりだ、しかし——どんなにいい人間でも、死んじまったものは、仕方がないさ——それより、僕は君の話が聞きたいよ、君はどんな仕事をしてきたんだい、どういう道を歩いていたんだい。

ロオト 僕の歩いてきた道は、かねがね覚悟していたとおりだった——君は、僕の噂を一度も聞かなかったかい？——新聞で読まなかったかい。

ホフマン (少しうろたえて) さあね。

ロオト じゃあ、ライプチヒの事件を知らないのかい？

ホフマン うむ、あれか！——そうだったけ！——たしかあの時……いや、詳しいことは知らないんだ。

ロオト じゃあ、聞いてくれたまえ。

ホフマン (ロオトの片腕へ手をかけて) 話の前に——何んか御馳走しようじゃないか？

ロオト まあ、ゆっくり頂戴しよう。